

幼稚園における子育て支援の利用状況

—育児不安との関連から—

荒牧 美佐子¹ 安藤 智子¹ 岩藤 裕美¹ 金丸 智美¹
丹羽 さがの¹ 立石 陽子¹ 砂上 史子² 掘越 紀香³ 無藤 隆⁴

地域の幼児教育センターとしての役割が求められる今日の幼稚園における子育て支援プログラムに関し、それを利用する保護者に視点を当て、実際の利用実態について調査を行った。

本研究では、全国の幼稚園に子どもを在籍させている保護者並びに、幼稚園の子育て支援を利用したことがある未就園児を持つ保護者(N=6558)を対象に幼稚園における子育て支援について①預かり保育、②子育て相談、③未就園児に対する子育て支援の3つのプログラムの利用状況、利用に際しての理由、利用後の感想などについて調査を行った。その結果、「預かり保育」、「子育て相談」、「未就園児向けの支援」のいずれの利用者も、利用してよかったと肯定的に評価する割合が高かった。ただし、支援プログラムの提供者が幼稚園であることから、こうした取り組みを「親自身への支援」というよりも「子どもへの支援」と捉えている姿勢が見受けられた。

また育児不安との関連では、こうした子育て支援を「利用している」または「利用したいと考えている」保護者の方が、「利用の必要性を感じない」とする保護者よりも育児不安が高いことが明らかとなった。

問題と目的

少子化や核家族化などの社会的な問題を背景に、地域や家庭における子育て機能の低下が指摘されるようになって久しい。育児に関して相談相手のいないことや、育児経験の不足などから子育てに不安を抱く親も増えている。

そうした中で、社会全体で子どもを育てていこうとするための様々な社会政策が策定・施行されている。その一環として、「幼児教育振興プログラム」(文部科学省, 2001年4月)が制定され、幼稚園が「親と子の育ちの場」としての機能を果たすことの重要性について触れている。その具体的な内容としては「子育てにおける保護者の役割を学習する場を提供する」、「保護者が自己実現できる場を提供する」そして「保護者も地域に生活し、地域の一員としての存在を実感できる場を提供する」ことなどがある(全国国公立幼稚園長

会, 2003)。例えば、幼稚園の施設や機能の地域への開放、父親と子どもと一緒に活動できるような場の設定、また預かり保育の実施等がその内容・方法として挙げられる。またこうしたハードの部分のみならず、親への相談的支援や子育て情報の提供などもまた子育て支援の重要な位置を占めるようになってきている(飯長, 2001)。

ただし、近年の中心的な支援対策である預かり保育や延長保育については、保育者の50~70%前後が、子どもや親子関係、そして保育者自身にとってマイナスの影響を懸念しているという指摘もある(中野・竹田・加藤・土谷, 1999)。

そこで本研究では、そうした幼稚園における子育て支援を実際に利用する側の保護者に焦点を当て、その利用の実態について明らかにしていく。

1 お茶の水女子大学大学院人間文化研究科

2 弘前大学教育学部

3 大分大学教育福祉科学部

4 お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター(現所属:白梅学園短期大学)

方法

2004年2月から3月にかけて、事前に行った調査依頼で許可を得られた複数地域（青森、宮城、富山、東京、千葉、埼玉、神奈川、岐阜、静岡、三重、大阪、兵庫、大分、沖縄の各都道府県）の公立・私立および国立附属幼稚園計65の園を通じて、子どもを園に在籍させている保護者並びに園の未就園児向けの子育て支援を利用している保護者への質問紙の配布・回収の協力をお願いした。

質問紙は、回答者（保護者）の年齢、職業、学歴、家族構成、そして子どもに関する属性などのフェイス項目と、園における子育て支援（主に、①預かり保育、②相談事業、③就園前の親子への支援の3つのプログラム）の利用実態、利用理由、利用後の感想等についての項目、そして子育てに関する不安についての項目によって構成されている。

結果

1. 対象者の概要

調査対象者は幼稚園子どもを通わせる親、計6,558名である。所属する園種ごとの内訳は、私立4,797人（73.1%）、公立1,444人（22.0%）、国立附属317人（4.8%）である。

回答者と子どもとの関係については、母親が全体の97.7%、以下、父親（1.5%）、祖母（0.3%）、祖父（0.1%）、無回答（0.5%）であり、母親が大多数を占めている。

表1に保護者の属性について示す。

7割以上の母親が専業主婦であり、フルタイム勤務者は全体のわずか5%に過ぎない。母親の6割が帰宅時間を尋ねる項目において、「出かけない」と答えている。つまり、半数以上の母親が日中家にいて、幼稚園から帰ってからの子どもの面倒を見ていると考えられる。家族構成については、それぞれ挙げた人物（子どもとの関係において）と同居しているか否かを答えてもらい、結果を表2に示した。ほとんどの家庭が核家族であることがわかる。

次に幼稚園に在籍する子どもの属性についてたずねた。子どもが複数いる場合には、園に在籍する年少の方の子どもを対象としてもらった（表3）。

2. 預かり保育について

1) 利用の有無

預かり保育を利用したことがあるかどうかについて

表1 保護者の属性

質問項目	N=6558 (%)
母親の年齢	～19歳(0.4) 20～25歳(0.9) 26～30歳(11.4) 31～35歳(42.3) 36～40歳(34.2) 41～45歳(9.4) 46～50歳(0.8) 51歳～(0.1) その他(0.3) 無回答(0.3)
父親の年齢	～19歳(0.1) 20～25歳(0.4) 26～30歳(61.2) 31～35歳(29.4) 36～40歳(36.0) 41～45歳(19.9) 46～50歳(5.4) 51歳～(1.5) その他(0.7) 無回答(0.7)
母親の職業	フルタイム(4.7) 自営業(4.1) パートタイム・週25時間未満(9.7) パートタイム・週25時間以上(3.4) 在宅(4.4) 働いていない(70.4) その他(2.6) 無回答(0.8)
母親の帰宅時間	出かけない(58.3) 午後4時前(13.4) 午後4～7時前(9.0) 午後7～9時前(1.9) 午後9～11時前(0.6) 午後11時以降(0.6) その他(8.6) 無回答(7.6)
父親の帰宅時間	出かけない(1.0) 午後4時前(0.5) 午後4～7時前(12.8) 午後7～9時前(31.5) 午後9～11時前(27.7) 午後11時以降(15.8) その他(8.5) 無回答(2.5)
母親の最終学歴	中学校(2.0) 高等学校(34.8) 高等専門学校(2.7) 短期大学・専門学校(41.6) 四年制大学(17.1) 大学院(0.7) その他(0.6) 無回答(0.6)
父親の最終学歴	中学校(3.4) 高等学校(31.1) 高等専門学校(3.5) 短期大学・専門学校(11.4) 四年制大学(42.1) 大学院(5.8) その他(1.7) 無回答(1.1)

表2 同居人について

質問項目	N=6742 (%)
家族構成	母親(95.8) 父親(94.7) 母方の祖父(4.4) 母方の祖母(6.0) 父方の祖父(8.9) 父方の祖母(11.8) その他の血縁者(41.0) 血縁者以外(0.3)

表3 子どもの属性

質問項目	N=6742 (%)
子どもの年齢	0歳(0.1) 1歳(0.3) 2歳(0.8) 3歳(5.7) 4歳(29.0) 5歳(35.2) 6歳(28.2) 無回答(0.7)
子どもの性別	男児(51.0) 女児(48.4) 無回答(0.6)
きょうだい数	1人(17.7) 2人(58.6) 3人(19.8) 4人以上(2.6) 無回答(1.2)
出生順位	第1子(46.2) 第2子(38.6) 第3子(10.4) 第4子以上(1.1) 無回答(3.6)

て、預かり保育を「利用したことがある」「利用しようと思ったことはあるが、まだ利用していない」「利用しようと思ったことがない」の3項目でたずねたところ、結果は、図1のようになった。

全体の約半数が「利用したことがある」と答え、「利用してみたい」という群と合わせると6割を超えている。

2) 利用した理由

図1で示した「利用したことがある」という回答者（N=3469）を対象に、最もあてはまるとされる利用理由についてたずねた結果を図2にまとめた。

利用の理由としてもっとも多くあげられているのが、「一時的な用事（授業参観、美容院）」（12.3%）であった。続いて1割を超えた回答は、「友人との交流や

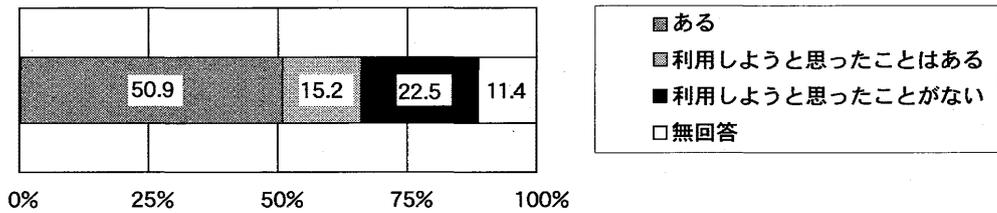


図1 預かり保育の利用状況

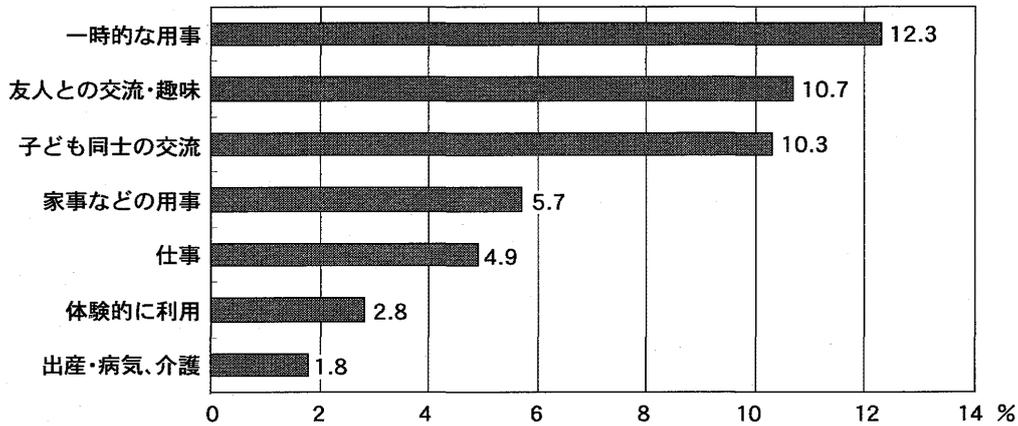


図2 預かり保育の利用理由

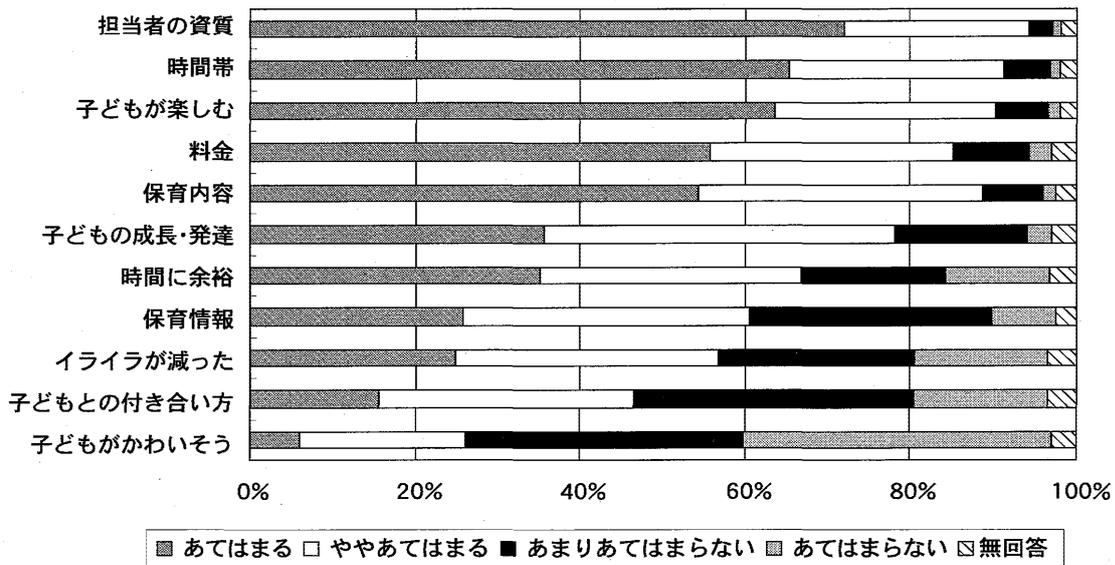


図3 預かり保育を利用しての感想

趣味など自分の時間をつくるため」(10.7%)、「子どもが友達と交流する場を作るため」(10.3%)となっている。一方、「病気や出産、家族の介護などの長期的な理由」を選んだ回答者は全体の2%に満たなかった。

3) 利用後の感想

また、同じように「利用したことがある」と答えた回答者に、預かり保育を利用して初めての感想について、項目ごとに「あてはまる」～「あてはまらない」までの4件法で回答を求めた(図3)。その結果、「あてはまる」と評価された割合の多かった項目は「担当する職

員の資質に安心している」(71.8%)であり、「ニーズにあった時間帯である」(65.2%)、「子どもが活動を楽しんでいる」(63.6%)、「料金に見合ったサービスである」(55.8%)、「預かり保育の内容に満足」(54.3%)と続いている。一方、少数派としては、「子どもとの付き合い方を見直せるようになった」(15.7%)、「親の都合を優先して子どもがかわいそうな気がする」(6.1%)等が挙げられている。

4) 利用しない理由

続いて、「利用しようと思ったことはある」「利用し

よと思ったことがない」といった利用未経験者に、預かり保育を利用しない理由について尋ねた（複数回答）（図4）。

最も多かったのは「幼稚園に預かり保育がない」（36.3%）であった。次に多かったのは「家庭で子どもと過ごす時間を大切にしたい」（24%）である。以下、「子どもが利用を嫌がる」（6.4%）、「長時間預けられて子どもがかawaiiそうだ」（6.1%）、「料金が高い」（6%）と続くが、どれも選択率10%未満となっている。

3. 子育て相談について

1) 利用の有無

次に、子育て相談の利用の有無についても、預かり保育に関する質問項目と同様、「利用したことがある」、「利用しようと思ったことはあるが、まだ利用していない」、「利用しようと思ったことはない」のいずれかで答えてもらった（図5）。

その結果、「利用したことがある」と答えたのは、全体の約1割で、「利用しようと思ったことはある」と足し合わせても、約25%にとどまっている。預かり保育は約半数が利用経験ありと答えたのに比べると少ない。

2) 相談方法・回数

子育て相談を利用したことがあると答えた713人について、その相談方法と回数について尋ねた（表4）。

利用方法としてもっとも多く挙げられたのは、「直接会って相談」であった。一方、メールは平均わずかに0.02回とほとんど利用者がいないことが明らかになった。

3) 相談内容

続いて、相談内容について図6にまとめた（複数回答）。最も多かったのは、「幼稚園での子どもの生活について」（64.9%）であり、「子どもの友達との関係について」（59.9%）、「子どもの身体やこころの発達・くせ等について」（52%）が順に続く。このように、子

表4 相談方法・回数

	平均利用回数 (N=705)
電話	0.27 (1.04; 0-10)
直接会って	1.96 (2.57; 0-30)
手紙	0.59 (4.05; 0-80)
メール	0.02 (0.38; 0-10)
その他	0.67 (7.74; 0-200)

注 () 内は標準偏差 [SD] と範囲。

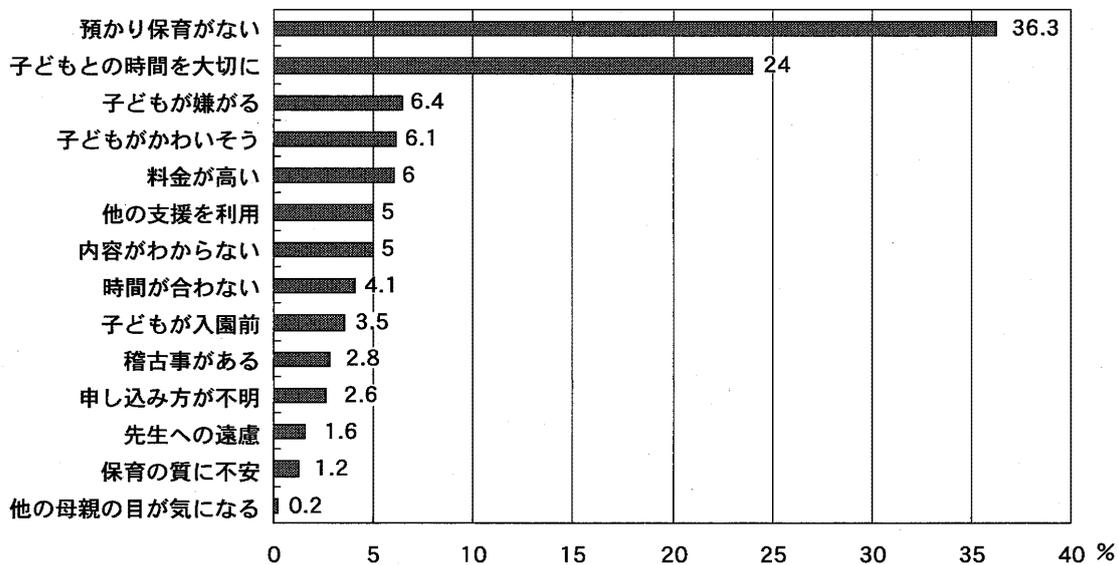


図4 預かり保育を利用しない理由

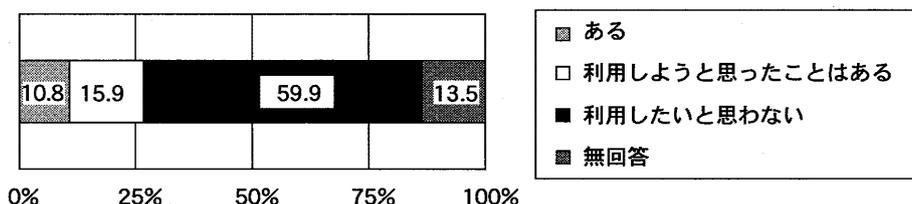


図5 子育て相談の利用状況

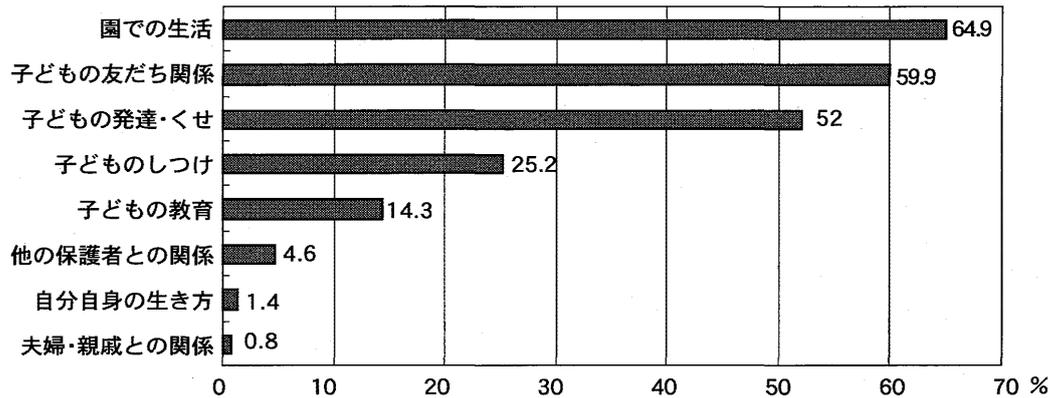


図6 子育て相談の内容

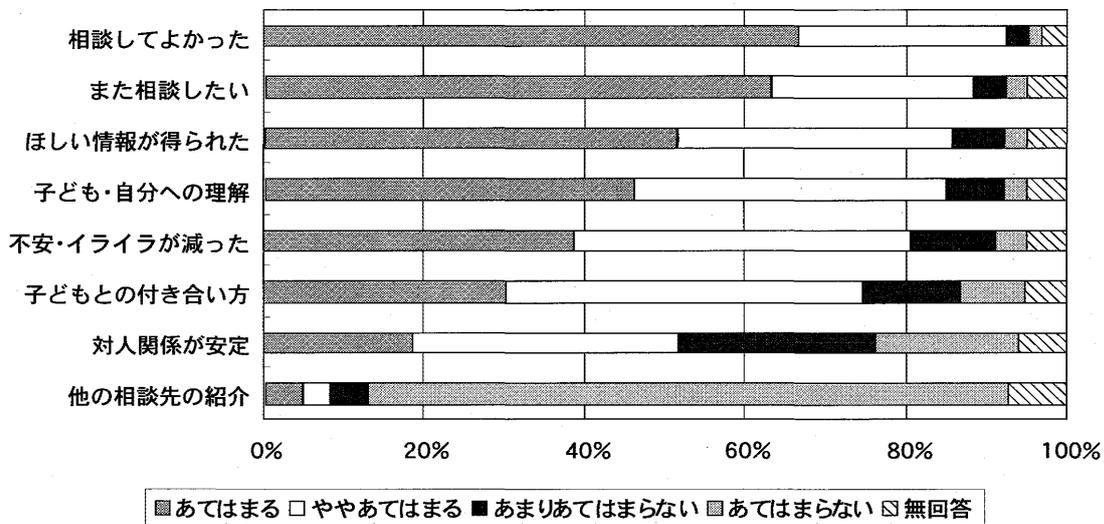


図7 子育て相談を利用しての感想

どもに関する悩みについては、それぞれ半数以上が当てはまると答えているのに対し、「他の保護者との関係について」(4.6%)、「自分自身の生き方について」(1.4%)、「夫婦や親戚との関係について」(0.8%)などの親側の悩みについての相談は、少数派であった。

4) 利用後の感想

利用後の感想については、あらかじめ設定した項目ごとに、「あてはまる」～「あてはまらない」までの4件法で尋ねた(図7)。「相談してよかった」(66.6%)、「また困ったときは相談したい」(63.4%)、「ほしい情報が得られた」(51.8%)、「子どもや自分についての理解が深まった」(46.1%)など、肯定的に評価する姿勢が見られた。

5) 利用しない理由

一方、利用したことがないと答えた5121人に、その理由について質問した結果を図8に示した(複数回答)。

最も多かった回答は、「利用する必要がない」

(39.6%)であり、続いて、「幼稚園で子育て相談を実施していない」(32.7%)となっている。その他の理由については、「相談そのものに抵抗がある」(4%)、「先生に遠慮がある」(2.6%)といずれも少数であった。

4. 未就園児向けの子育て支援について

1) 利用の有無

未就園児を対象とした子育て支援の利用状況については、図9に結果を示した。「利用したことがある」は全体の36.6%であった。また17.2%が「未就園児向けの子育て支援がない」と答えている。

2) 利用頻度

「利用したことがある」と答えた2,468人に対しその利用頻度について尋ねたところ、「1週間に1度以上」と頻繁に利用している人から、「1年に1度」とごくたまにしか利用しない人まで、答えが分かれた(図10)。

3) 利用した理由

続いて、利用している理由について図11にまとめた。回答者には理由に関するいくつかの選択肢の中から最

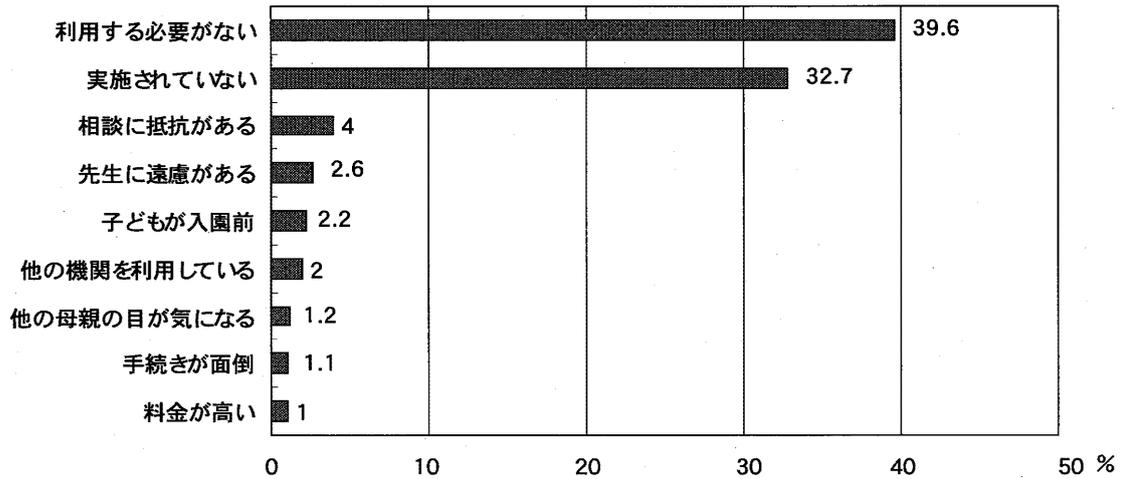


図8 子育て相談を利用していない理由

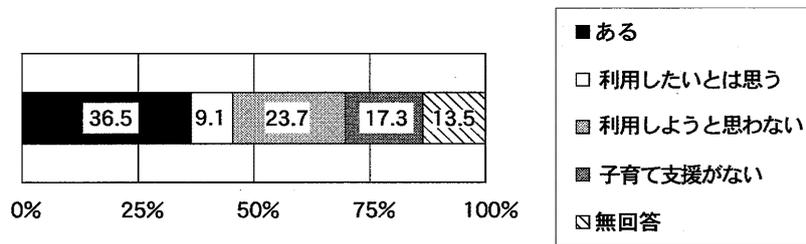


図9 未就園児向けの子育て支援の利用状況

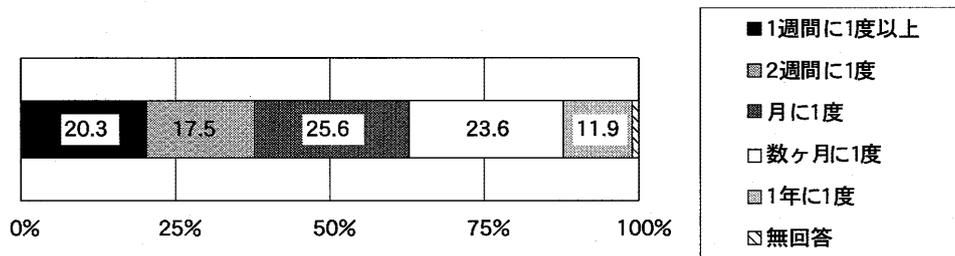


図10 未就園児向けの子育て支援の利用頻度

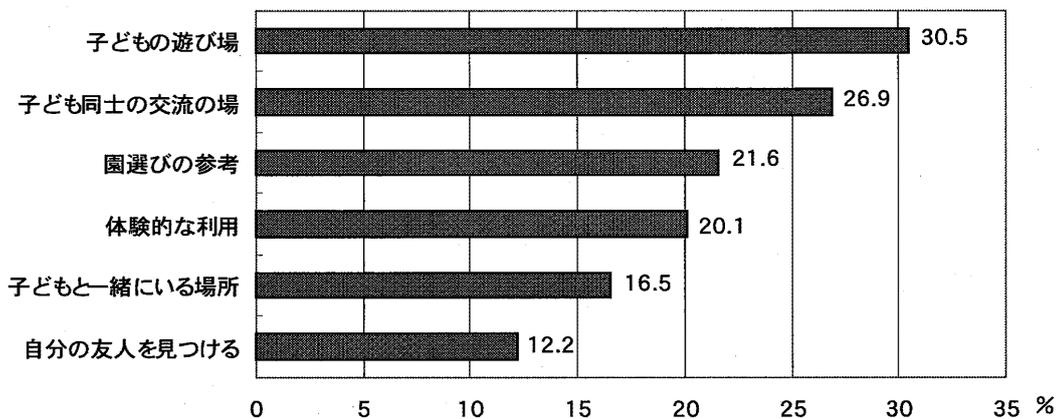


図11 未就園児向けの子育て支援の利用理由

も当てはまるものだけを挙げてもらった。
 「子どもの遊び場として魅力的だから」(30.5%)、
 「子どもが他の子どもと交流する場をつくるため」
 (26.9%)、「園選びの参考のため」(21.6%)などが上

位に挙げられた。
 4) 利用後の感想
 未就園児向けの子育て支援を利用してみた感想とし
 ては各項目について、「あてはまる」～「あてはまらな

い」までの4件法で評価してもらった(図12)。

その結果、もっとも「あてはまる」と答えた割合の高かった項目は「担当する職員の質に安心している」(61.1%)であり、以下「ニーズにあった時間帯」(59.4%)、「子どもが活動を楽しんでいる」(58.7%)、「料金に見合ったサービスである」(51.4%)と続いた。

5. その他の子育て支援の利用状況

以上、幼稚園における「預かり保育」「子育て相談」「未就園児向けの子育て支援」の3つのプログラムに関し、利用状況、利用理由、利用後の感想等についてまとめた。次に、これら3つのプログラム以外の子育て支援の利用状況との比較を行った。項目は上記の3点の他に、「子ども対象の体操クラブや絵画教室など」「園庭・保育室などの施設開放」「親子遊び活動」「父親と子どもの交流の場(土曜の「遊ぶ会」など)」「子育てセミナー・シンポジウム」「母親向けのサークル活動(人形劇やコーラスなど)」「地域の子育てについての情報をもらう」を設定した(図13)。

その結果、「預かり保育」は他の支援項目と比較しても利用度が高いことが明らかとなった。頻度に関わらず、少なくとも一度は「利用したことがある」割合は全体の半数を超えている。続いて「園庭開放」「親子遊び活動」を利用したことがある割合が約25%、「子育てセミナー」「父親との交流活動」となっている。「未就園児クラス」「子育て相談」は全体としては、利用度が低く、特に「子育て相談」は最下位だった。

6. 育児不安との関連について

今回の調査では、以上のような子育て支援の利用状況に関する実態について調べるとともに、保護者が今現在抱えている子育てに関する悩みや不安(以下、「育児不安」と呼ぶ)をどの程度抱えているかについても調査した。

続いては、保護者の育児不安と園における子育て支援の利用状況との関連についての分析結果をまとめる。

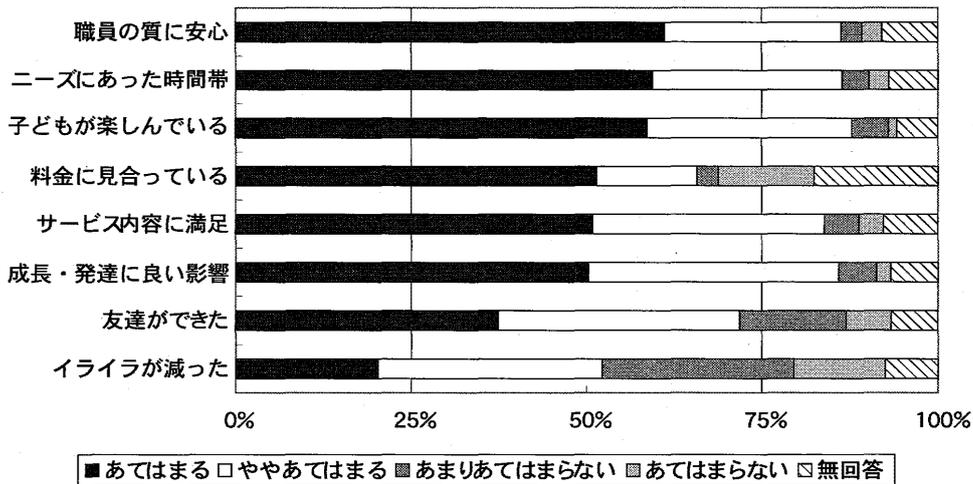


図12 未就園児向けの子育て支援を利用した感想

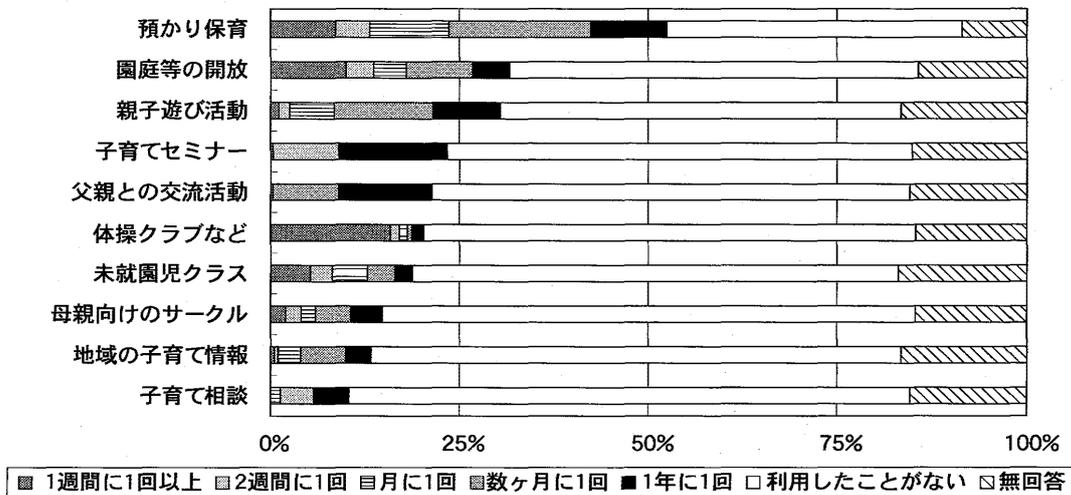


図13 園における子育て支援制度の利用頻度

1) 育児不安尺度の因子分析

育児不安尺度は、住田・中田(1999)を参考とし、いくつか項目を追加・削除したものをを使用した。各項目に関して「よくある」(4点)～「まったくない」(1点)までの4件法でたずねた。

育児不安に関する7項目を主因子法により因子分析した。固有値を1.2以上として分析した結果、1因子性であることが確認された(寄与率40.36%)。信頼性係数は $\alpha = .82$ である。

表5 育児不安の因子分析(主因子法)

項目内容	FI	h ²
子どもをうまく育てていけるか不安になる	.74	.55
他の母親と比べて、自分の育て方でよいのか不安になる	.72	.51
育児のことでどうしたらよいかわからなくなる	.69	.47
子どもにうまく対応できていないと感じることがある	.66	.43
子どもがわずらわしくてイライラする	.57	.32
友人や知人が充実した生活を送っているようなので焦りを感じる	.55	.30
自分の子どもでもかわいくないと感じることがある	.49	.24

2) 子育て支援の利用状況との関連

親の持つ育児不安が子育て支援の利用の有無によって異なるかどうかを確かめるべく、独立変数を子育て支援の利用有無、従属変数を育児不安とした一元配置の分散分析を行い、その後Tukey法を用いた多重比較を行った。

なお、子育て支援については①預かり保育、②子育て相談、③未就園児向けの支援の3つを設定した。

① 預かり保育

預かり保育を「利用したことがある」「利用したいと思うが、まだしていない」「利用しようと思わない」の3群において、育児不安の高さを比較した結果が表6である。

表6 預かり保育利用の差による育児不安の分散分析(各群の平均値とSDおよび多重比較の結果)

項目	1.利用したことがある (N=3242)	2.利用したいと思う (N=970)	3.利用の予定なし (N=1426)	F値
育児不安(1,2>3)	16.69(3.58)	16.41(3.55)	15.78(3.76)	31.23***

注. ***p<.001

ここにあるように育児不安のもっとも高い群は、「利用したことがある」群であり、多重比較の結果、利用の経験有、または、利用してみようと考えている群は、利用の必要性を感じていない群よりも有意に育児不安が高いことが明らかとなった。

② 子育て相談

続いて、子育て相談の利用状況についても預かり保育同様、3群間での比較を行った(表7)。

表7 子育て相談利用の差による育児不安の分散分析(各群の平均値とSDおよび多重比較の結果)

項目	1.利用したことがある (N=683)	2.利用したいと思う (N=1011)	3.利用の予定なし (N=3810)	F値
育児不安(1,2>3)	17.26(3.52)	17.10(3.46)	16.06(3.67)	54.54***

注. ***p<.001

その結果「利用したことがある」群並びに「利用したいと思う」群は「利用したいと思わない」群よりも有意に育児不安が高いという結果が得られ、預かり保育の利用状況に関する結果と同様であった。

③ 未就園児向けの支援

最後に、未就園児向けの支援利用状況に関する各群の比較の結果を表8に示す。

表8 未就園児向け子育て支援利用の差による育児不安の分散分析(各群の平均値とSDおよび多重比較の結果)

項目	1.利用したことがある (N=2323)	2.利用したいと思う (N=579)	3.利用の予定なし (N=1503)	F値
育児不安(2,1>3)	16.64(3.58)	16.77(3.54)	15.81(3.73)	28.18***

注. ***p<.001

平均値を比較してみると、もっとも育児不安が高いのは「利用してみたいと思う」という群であり、「利用したことがある」「利用したいと思わない」と続いた。しかし、多重比較の結果、有意差が見られたのは「利用したいと思う」「利用したことがある」という利用の意思のある群と、「利用したいと思わない」という利用の必要性を感じていない群との間であった。

考察

1. 利用実態について

今回の調査では、主に「預かり保育」「子育て相談」「未就園児向けの子育て支援」の3点にポイントを絞って利用者の実態を明らかにした。

結果、預かり保育の利用者は全体の半数を超え、他の子育て支援に比べると利用度が高いことが明らかとなった。こうした利用者は「一時的な用事」や「友人との交流・趣味」などの特別な予定があるときに、単

発的に利用している様子が伺える。また「子どもが友達と交流する場をつくるため」が利用理由の上位に挙がっていることから、降園後の子どもの遊び場確保として利用している保護者も多いといえる。

以上、預かり保育の利用者は、親側・子ども側両方の理由からこれを利用しているが、親側の都合によるものであってもそれは一時的であることがわかった。こうした利用形態とも関連し、預かり保育後の利用感想では、「長時間預けられて子どもがかわいそう」だと答えた保護者はごく少数であった。つまり、子どもの負担にならないよう、保護者が配慮していると思われる。しかし、その一方で、単発的な利用にとどまっていることから「子どもとの付き合い方を見直せた」や「自分がイライラすることがなくなった」などの効果はなかなか得られにくいようだとはいえる。

また、利用しない理由としては、支援そのものがないケースを抜かすと、第一に「子どもとの時間を大切にしたい」が挙げられた。このことから、預かり保育を利用する保護者も、利用しない保護者も子どものことを優先的に考え子どもの負担にならぬように気遣っている様子が伺える。

また、預かり後の感想で「担当者の質に安心している」と答えた保護者が全体の7割以上いること、そして利用しない理由では「保育の質に不安がある」をあげた人はわずか1.2%にしか過ぎないことから、保育者の質に関しては、預け先が普段子どもの通う幼稚園であることにより、信頼を置いているものと思われる。

続いて、子育て相談については、利用者がわずか全体の1割程度にとどまっているという結果が得られた。わざわざ相談時間をとってもらうのは、気軽に利用するというよりも、よほど悩むことがあるときに限るものかもしれない。これは、「実際に利用したことがある」と答えた人よりも、「利用しようと思ったことはあるが、利用したことはない」と答えた人の方が多かったこととも関連するのではないか。登園・降園の際に何気ない立ち話の中で、幼稚園の職員と会話を交わすとは異なり、子育て相談と身構えると、利用者にとってはなかなか敷居が高いものと思われる。また、相談相手が園の先生であることから、相談内容も「園での子どもの生活」や「子どもの友だち関係」「子どもの発達・くせ」など、幼稚園に関わる事柄が上位を占めている。子どもに関することであっても「子どものしつけ」や「子どもの教育」など、どちらかというと家庭に重点が置かれるような問題についての相談は少ない。万が一、保護者が子育て全般に関してなんらかし

らの悩みを持っていても、それが幼稚園に関連のないことならば、相談相手として園の職員を選んでいないということである。しかし、このように幼稚園での子どもの生活に関連したことに相談内容を絞っているためか、相談後の感想として「利用してよかった」「また利用したい」と答えた保護者は利用者全体の6割以上に上る。「ややあてはまる」までを含めると実に9割前後が満足していると答えている。

最後に、未就園児向けの子育て支援については、同じ利用者であっても、多い人は1週間に1度以上から、少ない人は1年に1回程度と利用頻度にかかなりのばらつきが見られたのが特徴である。これは、今回の調査では漠然と「未就園児向けの支援」としか定義しなかったことも原因のひとつだと考えられる。ただ、利用の目的としては、預かり保育と同様、「子どもの遊び場」や「子ども同士の交流の場」としての利用が上位にあがっていた。預かり保育のことも含め、子どもと一緒に、あるいは子ども同士だけで安心して遊ばせる場所の確保が難しいといった実態がうかがえる。

以上、預かり保育、子育て相談、未就園児向けの子育て支援の利用実態調査から、保護者側が幼稚園における子育て支援を、「親への支援も含めたもの」としてよりも「子どものための支援」として捉えているのではないかと思われる。子育て支援の主体が幼稚園であることから、保護者がこのように捉えるのは仕方がないといえるかもしれない。しかし、そうすると中野ら(1999)の指摘するような、特に預かり保育のような支援は子どもや親子関係にマイナスの影響を与えるのでは、といった保育者の懸念が、保護者にとってはあくまで懸念に過ぎないのではないかと考えられる。

2. 育児不安との関連について

育児不安と子育て支援の利用状況との関連については、預かり保育、子育て相談、未就園児向けのいずれにおいても同様の結果が得られ、利用経験あり、もしくは利用の意思のある人は、利用する必要性を感じていない人よりも育児不安が高いことがわかった。これは、育児不安の高い保護者はそうでない人よりも幼稚園での子育て支援サービスへの関心が高いことを示している。預かり保育等の子育て支援が、保護者の育児不安を軽減する効果を持っているか否かについては、今回の調査結果からだけでは判断しきれないが、子育てへの不安を抱える人たちが幼稚園での子育て支援にも関心を寄せ、利用を考えていることから、今後ますますこうした取り組みの重要性について検討していく必要がある。

3. 今後の課題

今回は、保護者の側にたった幼稚園での子育て支援についての評価・利用状況の調査をまとめた。これ以後、支援を提供する側の幼稚園とそれを享受する側の保護者との比較も必要となるだろう。保護者側がどういったニーズを抱えているか、そして幼稚園側がそれをどう捉え、また、それに対しどのように答えているのか。こうした両者の思惑が一致してはじめて意味のある子育て支援が実現できるものとする。

また、今回の調査から育児不安と園における子育て支援とが関連を持っていることも明らかになった。こうしたことから、具体的にどういった支援が育児不安を軽減する効果を持つかについても今後追究していきたい。

文献

- ベネッセ教育研究所 (2000). 第2回 幼児の生活アンケート報告書. 東京:ベネッセコーポレーション.
- 飯長喜一郎. (2001). 子育て支援における相談のあり方. 家庭教育研究所紀要, 23, 29-35.
- 伊志嶺美津子・新澤誠治. (2003). 支援のかたち. 21世紀の子育て支援・家庭支援:子育てを支える保育をめざして. (pp.38-50). 東京:フレーベル館.
- 中野由美子・竹田真木・加藤邦子・土谷みち子. (1999). 今後の育児支援を保育者の視点から考える. 家庭教育研究所紀要, 21, 5-44.
- 住田正樹・中田周作. (1999). 父親の育児態度と母親の育児不安. 九州大学大学院教育学研究紀要. 2, 19-98.
- 全国国公立幼稚園長会 編. (2003). 新しい時代を拓く 幼稚園運営のポイント Q&A. 東京:ぎょうせい.